

M-GTA 研究会 Newsletter no. 5

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ne.jp

世話人：青木信雄、岡田加奈子、小倉啓子、小嶋章吾、斉藤清二、佐川佳南枝、柴田弘子、林葉子、水戸美津子、筒口由美子、木下康仁

第 27 回 研究会の報告

【日時】 2004 年 7 月 31 日(土) 13:00~18:00

【場所】 立教大学(池袋キャンパス) 10 号館 302 教室

【参加者（敬称略、順不同）】

滝原香（富山医科薬科大学）、八塚美樹（富山医科薬科大学）、塚原節子（富山医科薬科大学）、原元子（富山医科薬科大学）、矢吹道子（虎の門病院）、福島哲夫（大妻女子大学）、隅谷理子（大妻女子大学）、鳩山淳子（佐賀大学）、藤田奈緒（佐賀大学）、納富史恵（佐賀大学）、坂本智代枝（大正大学）、長住達樹（群馬大学）、荒井昭子（名古屋市立大学病院）、鹿野裕美（宮城大学）、西能代（千葉大学）、酒井都仁子（長南町立西小学校）、山崎浩司（京都大学）、佐川佳南枝（西川病院）、林葉子（お茶の水女子大学）、佐瀬恵理子（東京大学）、山崎登志子（広島国際大学）、林裕栄（埼玉県立看護短大）、埜崎健治（目白大学）、寫末憲子（埼玉県立大学）、松戸宏予（筑波大学大学院）、笹野京子（新潟県立看護大）、高塚麻由（新潟県立看護大）、天沼理恵（天竜病院付属看護学校）、山井理恵（明星大学）、伊藤和子（愛知江南短大）、藤丸千尋（久留米大学）、小林治子（龍谷大学大学院）、青木弥生（大妻女子大学）、荒井春生（武蔵野大学大学院）、大西潤子（武蔵野大学大学院）、梶谷みゆき（島根県立看護短大）、宗林弥生（東洋英和女子大大学院）、山川裕子（佐賀大学）、小倉啓子（青梅慶友病院）、三毛三予子（甲南女子大）、木下康仁（立教大学）、の計 41 名…記録漏れの方が数名いると思います。すみません。

【世話人会報告】

1. 第 4 回公開研究会の広報について。斎藤先生に「臨床心理学」「医学界新聞」への広報をお願いした。小嶋さんに広島、岡山など近県への福祉関係方面への広報をお願いする。
2. 用語集について。M-GTA の理解を中心にして、他の GTA との比較、関連の質的研究へと進めていく。会員から、どういうレベルで混乱しているか、理解の現状を把握するために ML で用語を拾い上げていく。まずコアメンバーを確定し、作業行程表をつくる。作成プロセス自体が特色となるものにする。
3. 次回の研究会は予定通り 9 月 11 日、次々回は 12 月 11 日。

（文責 佐川）

~~~~~

## 【研究報告 1】

「地方 A 県高校生のコンドーム使用・不使用に関する相互作用プロセスの修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析——続編：女子高校生データの分析結果報告——」

京都大学大学院 医学研究科／人間・環境学研究科 山崎浩司

### 1. 発表の要旨（前回から変更した部分のみ：M-GTA Newsletter #4 参照）

#### 1) 研究テーマ

地方 A 県に住む女子高校生のコンドームをめぐる相互作用プロセスを探り、HIV/性感染症/望まない妊娠などを誘発しうる彼女達の意識や行為・行動とそれらの社会的コンテキストを同定する。

#### 2) 現象特性

女子高校生がコンドームを入手する・しない，使う・使わないという結果に至る女子高校生と，性交渉の相手・友達・コンドームを購入する店の店員や客・ラブホテルを利用する他の客などとの，直接的または間接的な相互作用。

#### 5) データの収集法と範囲

- ① フォーカス・グループ・インタビュー（全 8 グループ：1 グループ 4～7 名）
- ② リクルートは養護教諭や市職員の協力により，交際経験のある友人同士の学生 6 名前後を集めてもらった。研究参加者の紹介によるリクルートも行った。
- ③ 合計 41 名（3 年生 29 名），平均年齢 17.2 歳，性経験者 35 名。35 名中 21 名は性交渉の累積相手数が平均 4.7 人。所属高等学校は，A 県 A 市と B 市市内の私立・公立・国立の 3 種類（普通科のある高等学校，商業高等学校，工業高等専門学校）。

#### 6) 分析焦点者の設定

- ① 性経験のある A 県女子高校生で，ほとんどコンドームを使用していない者
- ② 性経験のある A 県女子高校生で，時々でもコンドームを入手・使用している者

#### 7) カテゴリー生成

- ① 不使用：17 概念から 8 カテゴリー（コア 1）を成，3 つのプロセス領域に統合
- ② 入手・使用：20 概念から 7 カテゴリー（コア 2）生成，3 つのプロセス領域に統合  
→入手＝4：使用＝3 カテゴリー。概念 2 つはカテゴリー化できず。

#### 8) 方法論的限定の確認

- 疫学的なエイズ予防介入研究の一環として、介入に役立つ情報の獲得を目指してデータが収集されたため、収集の目的と分析の目的との間にズレがある
- 対象者にコンドームを頻繁に使用している者が数名しかいない（追加データを収集していないことの問題）

## 9) 論文執筆前の自己確認

- 本研究の学術的意義は、①従来の行動理論に基づいた KAB (知識・意図・行動) 研究の限界——対等な 2 者が主体的かつ理性的に判断・合意できる状況が前提——を指摘し、状況・文脈分析の重要性の指摘、②保健医療研究における社会学的方法論や理論の応用性の指摘(準拠集団理論, 認知的不協和理論など)。
- 本研究の参加者は、養護教諭とつながりを持ち、保健室をよく訪れる学生(性経験率が有意に高い)を中心にリクルートされているため、そうでない学生を調査した場合、大幅に異なる性意識や性行動が語られる可能性がある。
- 本研究がオリジナルに提示できる結論は、不使用については、日本ではコンドーム以外にピルその他の避妊法が普及していないため、貧妊体質信仰などの独自の避妊実践が確立され、コンドーム使用の必要性が認知されなくなっている側面があること。入手と使用については、コンドームを対人関係ツールとして、避妊などの実用以外の目的で入手・保有されるケースがあることや、ラブホテルのコンドームは持ち帰るためにその場では使用されない可能性があったり、他の客によるコンドームへの悪戯を警戒して使用されない可能性もあったりすること、など。先進国における類似の研究では、〈貧妊体質信仰〉や〈対人コミュニケーションツールとしてのお守りゴム (= お守りコンドーム)〉のような知見は存在しない。

## 1. 質疑応答とコメント (懇親会におけるコメントも含む)

- この研究が M-GTA に適した研究であるかについて不明瞭→対象となる現象がプロセス特性を持ち、分析によって得られる知見が現場において応用可能であることを想定している点で、M-GTA に適している。
- 「今は妊娠できない」という概念は単独にしておくよりも、〈相手に装着〉のカテゴリーに含まれるべきではないか。また、「入手は相手次第」についても、単独ではなく〈相手依存型使用〉カテゴリーとの関連性を考慮すべきではないか。
- 入手や使用のプロセスを表す概念が、現象のエンドポイントである入手や使用について不安定であるようすが、複数の矢印の種類(実践、破線など)によって表されており、少しわかりにくい。
- (木下先生のコメント) 現象特性には始点と終点があるわけだが、その意味でそのプロセス特性をどこまできちんと捉えられているかがいまひとつ不明瞭。また、訊きたいことが訊ききれてないところがあるが、方法論的限定としつつも、それ

でもグラウンデッド・オン・データで見てゆき、推測的考察をできる範囲内ですべき。

- 〈かわいさ中心の3大志向〉や「かわいさ志向」などのカテゴリー名や概念名にプロセス性がない。「かわいい」とはどういうことを指しているのか、といった点に関する研究者自身の解釈が必要だが、それがなされていない。
- 実際の性交渉では、相手にコンドームを使ってもらえたりもらえなかったり、といった男女間の駆け引きがあったりするはずだが、それが結果図に十分反映されていない。
- 女子高校生の自己効力感や自尊心の低さが、コンドーム使用を相手次第にしてしまう側面なども解釈によって浮き彫りにすべきだが、それが表されていない。
- 相手と一緒に買いに行ったコンドームは実用的（＝避妊）に使用されるという特徴があるそうだが、〈購入協力〉という概念名ではそのイメージが全然浮き上がってこない。
- コンドーム使用に照準するにしても、彼女達の自発性に照準するとかえって論点がずれてしまうので、自発性よりも状況に左右されながら使用・入手に至るプロセスに限定して考察すべき。

## 2. 感想と展望

- 今回も多数の有用なご意見をいただきまして、ありがとうございました。痛感したのは、概念生成におけるプロセス性の重視が疎かになっている、ということでした。対象となる現象の始まりから終わりまで、どのようなプロセスが展開してゆくのかを浮き彫りにするには、個別の概念名／カテゴリー名とそれらの間の関係が、動きをイメージさせるようなものでなくてはならないのだと思いますが、この点がまだまだ不十分だったのではと反省致しました。この点からの修正を経て、次は男子高校生のデータにとりかかろうと思います。皆様のご指摘に、改めて御礼申し上げます。

~~~~~

【研究報告2】

精神障害者が在宅生活を維持・継続するための訪問看護師による看護援助
ー統合失調症の利用者への訪問看護師による支援プロセスー

埼玉県立大学短期大学部 看護学科 林 裕栄

1. 発表の要旨

在宅精神障害者の在宅生活を維持するために訪問看護師がどのような看護実践を行って

いるのかを明らかにするためにフィールド調査を行ったものをまとめた。M-GTA を分析方法として採用することが妥当であるかの検討、分析ワークシートの紹介および概念生成、カテゴリ候補の紹介、結果図、ストーリーラインまで報告した。

2. 質疑応答とコメント

- 分析テーマから何を導き出そうとしているのか？→訪問看護がどのようにして始まり、利用者のさまざまな変化に訪問看護師はどのように対応しているのか、在宅生活をどのようにして支援しているのかを明らかにする。
- 訪問看護には、介護保険のようなプランはないのか？→今のところ介護保険の枠に入っていないので、ケアマネジャーがいるわけではない。そのため、医師の指示書により訪問看護は始まるが、それぞれの訪問看護師の考えで援助が行われる。
- 結果図では、看護援助と看護師の心理面の2つがあるが、どちらを明らかにしたいのか？→看護援助の幅や差を分析していきたい。その中に看護師の感情を含めていきたい。
- 結果図がうまく動き出していない。→概念と概念のつながりを検討するには、理論的メモが大事になる。
動き出さないのは、データの取り方もある。どのようにとるかである。時系列的に聞いていくといい。
- 援助行為には葛藤も大事であるので、医師や看護師との関係も加えたほうがいい。
- 援助を行う判断の根拠が大事だ。このあたりを個別にもっと詳しくインタビューをしたほうがいいのではないか。

3. 感想と展望

今回は、研究発表のチャンスをいただきまして、大変感謝しております。また、皆様から貴重なご意見をいただき、研究を進める上で非常に役に立ちました。具体的なインタビューの示唆もいただき今後のデータ収集に大いに役立ちそうです。また、皆様との意見交換の中で自分自身があいまいであった部分も言葉にすることで少しずつまとまるようになってきたように思います。終わった後にも、何人かの方には励ましのエールをいただいたりして、なんとしてでもやり遂げなければという覚悟ができました。

M-GTA研究会には、長く所属させていただいておりますが、やはり自分で苦労してまとめていかないとわからないものだと思感しました。それから木下先生の書かれたご著書は、読んだなかでわかったつもりでいたのですが、読み込めていないことがよくわかりました。実際のデータをもとに、テキストと照らし合わせてみるとそのことに気づきます。分析を進めていくことがわかることに繋がるのだということ改めて理解できたように思います。今回研究会では、皆様に大変助けられました。恩返しができるように分析を進めていき、論文として早くまとめたいと思っています。また、これを通して現場の看護が少し

でも発展するように微力ながら貢献していきたいという思いにかられました。重ねてお礼申し上げます。

~~~~~

### 【研究報告3】

心疾患で集中治療室に緊急入院した患者家族の心理プロセス—壮年期男性患者の心疾患発症に伴う妻の心理的危機の発生から落ち着きを取り戻すまで—

鳩山淳子（佐賀大学医学部医学系研究科 基礎看護学講座M2）

報告形式：報告者（鳩山）から内容について発表したあとに、スーパーバイザー役の方と対話形式で進められ、その後皆様からのご指摘・ご意見をいただきました。

#### 1、発表の要旨

##### 1) 研究テーマ

心疾患で集中治療室に緊急入室した患者家族の心理プロセス—壮年期男性患者の心疾患発症に伴う妻の心理的危機の発生から落ち着きを取り戻すまで—

##### 2) 現象特性

壮年期男性患者の緊急入院という突然の危機的状況の発生によって、妻は心理的に不均衡な状態に置かれるが、患者の病状の回復や、患者本人などとの直接的な関わりを通して、心理的な落ち着きを取り戻す。

##### 3) M-GTAに適した研究であるかどうか

心疾患の発症率が増加・若年化している壮年期男性患者をもつ妻を対象に、患者の緊急入院による心理的危機状態の発生から患者の病状が安定し、妻自身の心理的安定を取り戻すまでの過程を明らかにすることによって、退院後を見据えた看護提供をしていく上で、まずはじめに入院する集中治療室において、家族ケアの時期と方向性を得ることができる。

##### 4) 分析テーマへの絞込み

明らかにしたいプロセスは、夫（壮年期男性）の心疾患発症による緊急入院によって心理的危機状況に置かれた妻が、患者本人や医療者などとの直接的なかかわりを通して、心理的に落ち着きを取り戻すまでの過程である。

##### 5) データの収集法と範囲

観察データとインタビューによるデータの2種類がある。現在8例終了している。

##### 6) 分析焦点者の設定

心疾患発症による加療のために、初めて集中治療室に入院した壮年期男性患者の妻である。

7) 分析ワークシート

全23の概念を作成している。例として「夫からもらえる安心」を提示。

8) カテゴリー生成

心理プロセスを4段階に分け、全13の概念から成る4つのカテゴリーを生成した。その他、心理プロセスに影響する概念として、9つの概念から4つのカテゴリーを生成した。現在のところ、コアカテゴリーはない。

9) 結果図

現在作成している概念とカテゴリーの関係を示す。

2、質疑内容

- ・研究の意義は何か？
- ・分析テーマは妥当か？
- ・対象者のサンプリングについて：初発とそれ以外を同じように分析できるか？
- ・観察記録の活用
- ・分析ワークシートの書き方について
- ・言葉の定義について：“落ち着き”をきちんと定義すべき
- ・他者との相互作用の部分が希薄になっている
- ・概念名と定義が一致していない：ヴァリエーションが説明できるものになっていない
- ・結果図について：一般的な心理プロセスになっている。妻の心理プロセスは、段階的になるのか？行き来戻りつするのではないか？
- ・オリジナルに提示できる知見は何か？

3、感想と今後について

初めて研究報告をさせていただき、皆様からたくさんのご意見とご指摘をいただきまして、ありがとうございました。私のようなものが、皆様の貴重なお時間をいただいて、自分の研究の発表をすることは、大変敷居が高いように感じておりました。しかし、勇気を出して貴重な経験をさせていただいたことで、大変勉強をさせていただくことができました。これから、何を明らかにしたいのかというところをもう一度自分の中ではっきりさせることによって、分析テーマの見直しから始め、分析を進めていきたいと考えております。そしてまた皆様に意見がいただけるようがんばっていきたいと思っております。これからも宜しくお願いいたします。

~~~~~

【構想発表1】

小児癌患児の父親の心理プロセスと他者との関わり

ー心理的危機状況から適応していく（あるいは不適応に陥る）過程ー

納富史恵（佐賀大学大学院医学系研究科基礎看護学講座 2 年）

< 報告要旨 >

子供が癌であると診断され、入院生活を余儀なくされるという危機的な状況下では単に患児と母親のケアのみでなく父親も含めた家族全体の危機として捉える看護の視点が大切である。そこで、本研究は報告例の稀な父親に焦点を当て、子供の入院前（体調不良・病院受診）、癌の診断という心理的危機状況から他者との社会的相互作用の中でどのように父親の心理が変化していくのかを明らかにしようとしている。

分析焦点者：①小児科病棟に入院中で退院の目途がついている初発小児癌患児の父親。

②外来通院している退院後 1 年未満の初発小児癌患児の父親。

< 質疑の要約 >

- ・ 気持ちを聞く時に、確実なもの＝行為について聞いていくのがいいのでは？
父親が何をどのようにしているのかという行為との関連で気持ちを聞く。
父親がどのように対処したかを、気持ちを聞く上でのポイントとする。
- ・ 心理プロセスというのは漠然としすぎている。
- ・ 子供が病気になる以前の父子関係なども必要なのではないか？
- ・ 父親の特徴を出す為、どうゆう視点で父親を捉えるのか？
- ・ 他者との関わりをどうして取り上げるのか？その根拠は？
父親個人としてみていくのか？妻を支える父親や子供の治療を援助するというサポート的立場としてみていくのか？
- ・ 父親の心理的变化をどのように捉えるのか？母親については先行研究からどんな変化をたどっているのかを知り、それを基に分析テーマを決めていけばいいのでは？

< 食事会の時に木下先生から頂いたご意見 >

- ・ 分析焦点者に退院後の小児癌患児の父親も含めてよい
- ・ 分析焦点者に初発の患児だけでなく、再発の患児の父親も含めてよい。

< 構想発表の感想 >

今回、構想発表をさせて頂き、また貴重なご意見を頂きありがとうございました。父親の気持ちを聞く場合に、まずは行為から聞いていくというご助言を、今後のインタビューから活かしていきたいと思っております。これから本格的な調査に入りますが、一生懸命頑張りますのでどうぞよろしくお願い致します。ありがとうございました。

.....

【構想発表 2】

企業組織における中間管理者の心理プロセスについて

- コミュニケーション・スタイルを中心に -

大妻女子大学大学院 人間関係学研究科 臨床社会心理学専攻 修士課程 2 年 隅谷 理子

1. 発表の要旨

企業組織の中において非常にストレスがかかる立場といわれている中間管理者を対象に研究を行う。

- ・研究テーマ：中間管理者がチームマネジメントを行う上で、上司と部下間の相互関係の中で起こる中間管理者自身の心理プロセスを探ることにより、‘中間’である管理者の成長過程のメカニズムを明らかにする。
- ・現象特性：コミュニケーションを中心に上司と部下間の相互作用を分析することにより、チームマネジメントを行う上で中間管理者の成長へつながる心理プロセスを明らかにする。
- ・分析テーマへの絞込み：中間管理者がチームマネジメントを行う中で起こる気付きのプロセス気付きの中で特に、他者理解、自己理解、中間管理者として職務の把握の変化に焦点をあてる
- ・分析焦点者の設定：同一企業内の中間管理者（チームマネージャー職）

①上司がいること、②直属の部下がいること、③中間管理者になって数年経っていること

2. 質疑要約

- ・(発表者の疑問点)分析焦点者に、同一企業内での中間管理者と設定をしたが、異業種においての中間管理者に設定をするのとどちらがよいのであろうか。

⇒(木下先生)それは今の段階では大切な問題ではない。どちらにしても、データをとつとしても、分析をまとめる段階を考えると大変である。“中間”というのはなんとも制御しきれない曖昧さがある。対象者をもっと限定していくべき。その限定に照らして解釈がまとめていけるくらいにしたらどうか。

⇒例えば、研修プログラムを受けている人を対象とするのはどうだろうか。もし研修を受けた人という限定にするのでならば、現在受けている人ではなくて、研修修了後に実践している人にインタビューをするのが良いだろう。

⇒(木下先生)研修を受けた人という限定の入れ方はいい方法。任意のある会社ということになってしまうと、解釈のときになぜそうなのかという説明とそれを確かめていく作業が拡散していくことになりやすい。例えばコミュニケーションスキルの習得という目的をもって研修に参加した人たちを対象者に限定出来れば、それに照らして解釈をしていくことはしやすい。

- ・中間管理者の心理プロセスということで、全体に曖昧で漠然としている

⇒本人の性格による、マネジメントがうまく出来ない、コミュニケーションがとれない
というものは分析でどのように加味していくのか。

⇒その人にとってどういう状態がコミュニケーションをとれているというのか、どうい
うことがとれていないというのか、人によって違う。それをまず見ないといけない。
コミュニケーションの定義付け、成長の定義は何なのか。気付きのプロセスというの
も、何に対して気付くのか曖昧である。

3. 感想

木下先生をはじめ M-GTA の皆様に色々なご意見をいただき本当に感謝しております。
私の研究デザインが全体的に漠然としており、研究の視点も曖昧である事を知らされまし
た。私が何に興味を持ち、何を知りたくて、この研究テーマを選択したのか、原点に戻り
考え直したいと思います。余計な私の価値観で研究の方向性を当てはめてしまい、M-GTA
を使って研究をする意味を置き去りにしてしまったことに気付かされました。学ばせてい
ただいたことを必ず研究に活かしていきたいと思っております。本当にありがとうございました。

.....

【次回の研究会】

日時： 第28回、9月11日(土) 午後(13:30-18:00を予定)

場所： 大妻女子大学(多摩キャンパス)の予定です。詳細は後日MLでお知らせします。

【編集後記】

- ・ 第5号のニューズレターをお届けします。今回は研究報告3例、構想発表2例でした。
報告、発表をされた皆さん、ご協力ありがとうございました。
- ・ 今回も40名を超える多くの参加がありました。おそらく疑問や意見がいろいろとあつ
たのだと思いますが、時間の制約もあり皆さんの発言の機会が十分取れない状況にな
っています。休憩も短く、参加者同士でお互いに話す時間も十分取れません。何か良
い方法、ご提案があれば、お知らせください。
- ・ 発表者の研究について理解し考えるというのは一見受動的に思えますが、実はスーパ
ーバイザーの練習をしていることになります。この点を意識化されると、研究会での
学習がさらに深化できます。
- ・ 1ヶ月以上続く連日の猛暑でバテ気味ですが、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。
私は夏休みに入ったらあれこれ自分の仕事を片付ける予定でいたのですが、暑さの襲
来前に計画したときの意気込みはどこえやら、仕事をするのでもなく休みにするの
でもなくボーとした日々の一週間でした。どうぞ、お元気で。

(木下記)